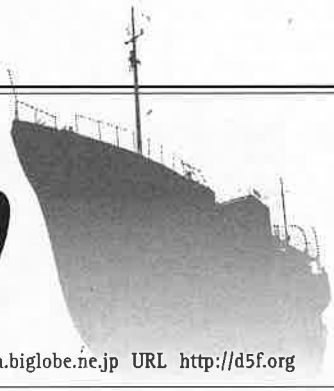


2007.09.01
No.339

福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



写真右上は夏休み工作教室にて。左上は各地で開かれた第五福竜丸展（愛知県岩倉市）より。左下はワシントンの高校生の見学。右下は七月一六日の特別展トークイベントで近藤さんが板を挟む道具を使い説明。



平和への願いひろげて 猛暑のなか多くの来館者

夢の島の緑も心なしか色あせるほどの連日の暑さでしたが、展示館には夏休みの課題のための高校生、中学生をはじめ家族連れ、牛乳パック工作教室参加の親子、生協の平和ツアーや自治体の市民ツアーなどたくさんの方々が来館者がありました。

遠方からの来館者も……韓国・中国・日本の教員の方々の見学、恒例となったアメリカ・ワシントンの高校生グループ、米クリーブランドからの研究者、カナダ国営放送による船体撮影と大石又七さんへのインタビュー、ストックホルムのヴァーサ・ミュージアムのガイドチーフ、マグナス・ベリさん一家（関連4めんの来訪、静岡大学経済学部）のゼミ生の研修とにぎやかでした。

第五福竜丸元乗組員で久保山さんについて一九七五年に亡くなられた川島正義さんの長女ご夫妻、公募した生徒た

ちの「福竜丸の絵」の展示に見入る方々、特別展を観に船大工さんや造船関係者も来館し、ボランティア・ガイドや館職員と話し込むこともしばしばでした。

トークイベント開催

七月一六日、建造六〇年特別展「船大工の技と仕事」開催を記念してトークイベントが開かれました。

焼津の船大工棟梁・近藤友一郎さん（近藤和船研究所主宰）は、船大工の手作りの仕事について実際の道具や模型を示しながら話されました。第五福竜丸船体の補修にあたりられた日塔和彦さん（東京藝術大学客員教授）は、二〇年前の船体の大補修について解説し、これからの適切な修復をしていけば長く保存が可能であると話されました。

久保山忌 九月二三日の
催しは4めんに掲載

作文

久保山さんの願い・私の願い

焼津市・豊田小学校六年 杉山 優有奈

焼津市主催の「第五福竜丸事件6・30市民集会」(焼津文化センターホール、六月三〇日)で発表された豊田小学校六年の杉山優有奈さんの作文を紹介します。

私が初めて第五福竜丸事件を知ったのは、歴史民俗資料館のクイズラリーをやった時でした。そんなに有名な船があるの?被爆って、広島と長崎のことじゃないの?軽い気持ちで、資料館の一番奥の部屋に向かいました。一歩足を踏み入れた瞬間、その小さなせまい空間だけ、何かがちが



杉山優有奈さん

うと感じたのです。なんだろうこの雰囲気は、そう思い私は、展示されている写真や手紙などの資料を一つ一つ見ていきました。

病氣と闘いながら回復への期待をもっていった愛吉さん。手紙の中でかぜをひかぬよう、何でも食べて病気をしないようにと子供の健康を気づかう優しいお父さんだったのです。

そんなお父さんと一緒に動物園に行くのを楽しみにしていた娘のみや子ちゃん。それは私と同じ幸せな家族の姿でした。しかし、たった一つの水爆が、この家族の幸せをうばったのです。何一つ悪いことをしていないのに突然愛吉さんをおそった「死」の苦しみ、そして残された家

族の悲しみ。そんな悲しさを、重苦しさがいつぱいつまった場所で、私は胸がしめつけられるような悲しさを感じました。

すずさんの手記に書かれていた「死の灰」が一体どんなものなのか、そして本物の第五福竜丸に会いたくなつて、私は東京の第五福竜丸展示館へ行ってきました。

*

よくこんな小さな木造船で、広い太平洋のまん中までマグロをとりに行くことができたなあ、このチョークの粉みたいな白い灰が愛吉さんの命をうばってしまったのか、

などおどろくことばかりでした。「ブラボー」と名付けられたこの水爆は、広島・長崎に落とされた原爆の約千倍もの威力をもつと聞き、そんなにもおそろしいものを人は創り出してしまったのだとさうにおどろきました。

「ブラボー」とは日本語で「素晴らしい」という意味です。しかし、被害者までも出して行かう実験などが素晴らしいのかと、私はおどろきが次第に怒りに変わっていき

ました。愛吉さんも他の乗組員も、この事件にそうぐうしなれば、ずっと健康で生きていたはずなのに。これも全部、世界に核兵器というものがあつた、それを使って戦争をしようとする人々がいるせいなのだという思いが、こみ上げてきました。

*

展示館で私は幸運にも第五福竜丸の乗組員として被爆し、現在この事件を広く世の中の人々に語り伝える活動をなさっている大石又七さんにお会いし、話を伺うことができました。

事件後、東京に移り住んだ又七さんでしたが、お子さんが不幸な生まれ方をしたり、ご自身も様々な病氣にかかったりして、今までたくさんの悲しいおもいをなさったそうです。だからこそ初めのうちはこの事件を誰にも言わず秘密にしていました。しかし、被爆した大石さんにしか語れないことがある。本当の悲しみを文字や形にして後の世に伝えていかなければ本当の平和が来ない。そう考え活動を始めたそうです。おだやかに

一言一言でいねいに話してくださった又七さんですが、その胸に秘められた深い悲しみ、怒りはどれだけ大きいでしょう。か。負った傷が表面に見えない分、その痛みや苦しみが強い気がしました。そんな私たちを第五福竜丸は静かに見つめているようでした。

*

この事件があつたからこそ、日本には非核三原則ができたし、北朝鮮をはじめ世界各国に向けて核兵器の使用禁止を訴えることができるのです。

この事件は「終わった事件ではない。始まった事件だ。」と又七さんはおっしゃいました。

第五福竜丸の役目は、世界から核兵器やその被害者がいなくなり、世界中が平和で幸せに暮らすようになることだと思います。しかし、今もなお世界中のどこかで戦争が起り、たくさん犠牲者が出ています。久保山さんの願い、そして世界中の人々の願いである「平和」は未だにかんたいていないのです。

(3めんにつづく)

書評『ビキニ事件の表と裏』 これだけは伝えたい 「漁師又七」の心

早野透

の被曝事件をこんなふうを描く。空いっばいの夕焼け色、水平線からの閃光、「何が起きたんだ」。あわててマグロ漁の縄を引き揚げる。海底から突き上げる地鳴り、巨大なきのこ雲、降り注ぐ白い灰。めまい、頭痛、吐き気、下痢、皮がむけて髪の毛が抜ける。母港の焼津に戻って原爆マグロ騒ぎ、乗組員の入院、放射能雨。「俺」の運命は、ここから大きく変わった。

◆

ヒロシマ、ナガサキから九年、戦後の焼け野原から立ち上がり、生きるのにせいじつばいだった日本国民は、ビキニ事件が起きて改めて原水爆の恐怖を感じたのだった。東京・杉並の主婦から原水爆禁止運動が広がる。大石さんの本は、あのころの日本社会の動揺をまざまざと伝えてくれる。

太平洋の赤道海域、ビキニ環礁での米国の水爆実験で被曝した大石又七さんの体験記はこれまでも本になっている。しかしこんどの本は、タイトルにもあるように「これだけは伝えておきたい」という気迫があふれる。自分を語るのに、「俺」という第一人称を使っている。クリーニング屋さんの大石さんではなく、若くたくましい「漁師又七」をほうふつとさせるではないか。

「俺」は、一九五四年三月一日に起きた「第五福竜丸」

山愛吉さんが「背中に高圧線が走っている」とうめきながら死ぬ。同じ病院に入院していた大石さんたちは、どれだけ放射能の後遺症が続くのか、次は自分が死ぬのかと不安にさらされる。大石さんは第一子を死産で失い、乗組員の多数がC型肝炎に襲われ、肝臓がんで死ぬ。放射能禍はずっと後世まで続く。

この夏、「夕風の街桜の国」という素晴らしい映画が上映された。広島で被曝した少女が原爆症に苦しんではいかない恋の中で死んでいく。それはさらに平成一九年の家族まで尾をひいていく悲しい、しかし心優しいストーリーである。私は、大石さんの「第五福竜丸」の仲間を思う痛切な気持ちと重ねて、この映画に涙した。

◆

大石さんがもうひとつ、これだけは伝えておきたいと思っただろうことは、政治や行政の冷たい対応である。日本政府はことを荒立てたくないと米国とわずかな見舞金で決着した。米国はビキニ被曝者を「研究」対象にしようとした。

した。ビキニの被曝者はヒロシマ、ナガサキと違って、被曝者手帳はおろか相談の窓口もなかった。大石さんたちは船員保険で治療を受けられるよう闘い、ようやくかちとることができた。大石さんのこんどの本には、「第五福竜丸」の仲間のその後の苦闘の人生が凝縮されている。

◆

去年の九月二三日、久保山愛吉さんの命日に、東京・夢の島の「第五福竜丸展示館」の前の芝生で、大石さんを中心にマグロを食べる会が催され、私も参加した。トランプが「原爆許すまじ」のメロディーを吹く。そこには久保山さんの石碑があつて「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」と刻まれている。ほんとにそうしたい。

久保山さんが死んだ二日前の九月二一日に、いまの首相安倍晋三氏が生まれている。もうそれだけの歳月がたつてしまったけれども、「第五福竜丸」の事件を忘れるわけにはいかない。忘れてはいけない。

こんどの本は、大石さんの

(2めんからつづく)

第五福竜丸事件について調べれば調べるほどつらく悲しみが増してきました。つらいことは早く忘れたいけど、この事件だけは焼津に生まれた者として、平和を願う者として、忘れずに覚えておかなければ、と思いました。

「平和」のために私に何ができるかわかりません。でも、この事件と深く関わり、「平和」を強く願うことで、私の中で何かが変わっていくと思えます。

第五福竜丸は、平和を愛する人々を乗せて、今も核兵器のない平和な海を目ざして航海中です。

力強く、そして優しい口調がそのまま生きています。これらを生きる若い世代にぜひ読んでほしい。(朝日新聞編集委員、コラムニスト)

大石又七著「これだけは伝えておきたい ビキニ事件の表と裏」かもがわ出版、一五七五円(税込み)。展示館でも扱っています。

エンジンを守ろう 薬品塗りの作業



第五福竜丸展示館の前のひろばに展示されているエンジンの劣化がすすむなかで、今夏も埼玉の青年有志によるエンジンの薬品塗布の作業がおこなわれました。

8月26日、残暑厳しい暑さのなかで、10名余が午後1時過ぎから1時間にわたり作業をおこないました。

作業は、エンジンについての鳥のフンや枯れ草、くもの巣などの清掃、剥離した錆びた鉄を取り除くことからはじめ、つづいて薬品を丁寧に塗りました。

終了後、エンジンや船体の現状と今後について懇談会を開き、館職員からの報告、さらにエンジンの保護についての意見交換をおこないました。

折から第五福竜丸の保存に最初期から関わられた江東区の深井平八郎さんと都の組合ニュースで最初に水産大学に係留されている「はやぶさ丸」(第五福竜丸)を紹介した矢野政昭さんが来館され、ボランティア活動の青年たちに激励の言葉を送りました。深井さんは「このエンジンは第五福竜丸が被爆後まさに全速力で焼津まで船と乗組員を帰港させた功労者だ、そう位置づけて長く保存にとりくんでほしい」と述べていました。



ヴァーサ号博物館の チーフガイド来館

7月25日、ストックホルムにある木造軍艦ヴァーサ号の博物館の主任ガイド、マグナス・ベリさんが家族連れで来館しました。

展示館への見学を誘われた当協会の藤田秀雄副会長が同行して来館され、見学後、山村理事、日塔評議員、安田事務局長らと懇談しました。

ヴァーサ・ミュージアムとは、1628年8月10日進水航海を祝う関係者や聴衆の目前で、わずか1300メートル進んで突風にあおられ沈没した軍艦ヴァーサ号を保存し展示しています。

同艦は、船体の長さ47・5m、最大幅は11・7m、高さ(船底からマストの上)52・5m、10枚の帆をもち、大砲64門を装備する最新の木造軍艦でした。沈没から330年後の1956年沈没位置が確認され、周到な引き上げ準備の末に1961年4月海面に姿を現しました。

その後、船体内部の遺留品や人骨などの発掘と保存のための処置が30年以上にわたり行われ、1990年6月15日にヴァーサ・ミュージアムが竣工しました。

こんにちではヨーロッパで有数の船の博物館として多くの人々が訪れています。

久保山忌、展示館での催し

9月23日は第五福竜丸無線長久保山愛吉さんの53回目のご命日にあたります。秋分の日(9月23日)にあたるこの日には、今年も展示館で第五福竜丸を見学し、原水爆の問題や平和について語り考えようと多くの市民がつどいます。この日から企画展「手紙——子ども

たちが見たビキニ事件」が始まります。

【おもな催し紹介】

◇平和を語る第五福竜丸の集い

15回目となる集いは午前10時30分より午後3時まで。船首の左舷下のスペースで開かれます。民話の語り、紙芝居、うたと演奏、元乗組員大石さんの訴え、展示館ボランティアによる手紙の朗読などがおこなわれます。

◇久保山忌句会

27回目を迎えた句会は、午前10時半より展示館とその周辺を吟行し、久保山碑に献花ののち江東区民文化センターにて句会を開きます。今年は船体建造60年を記念して、「60年をお祝いする句」を参加者は持ち寄ることになっています。

◇第五福竜丸のつどい

東京原水協主催のつどいは、午後11時より展示館の見学午後2時より夢の島マリナーにて学習懇談の会を開きます。

◇マグロ塚を作る会

美味しいマグロを食べながらビキニ事件について語りあい、会員の近況を交流しあう会は正午から展示館まへのひろば、マグロ塚の近くでおこなわれます。

企画展「手紙——子どもたちが見たビキニ事件」

* 9月23日(日)ー12月23日(日)

* 第五福竜丸展示館(入館無料)

久保山愛吉さんと家族に寄せられたお見舞いやお悔やみの手紙は展示館に3000通保管されています。そのなかから子どもたちから久保山さんに送られた手紙を選び展示します。子ども達の事件にたいする思い、大人の反応への敏感な感性などが伝わってきます。